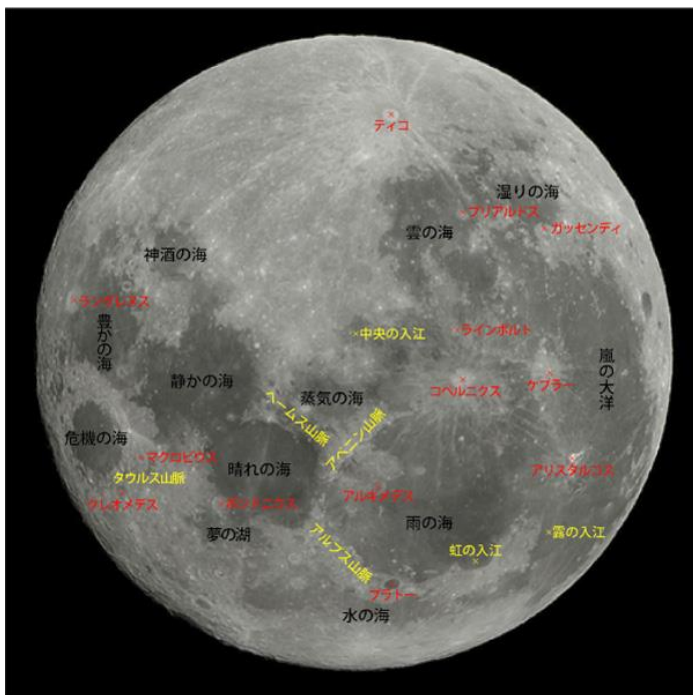


# かぐや姫が月に還った日

竹取物語を考える

作花一志著



月は最も近くの天体で、古来私たちの生活にも深くかかわってきました。古人は月の満ち欠けに神秘的な規則性を感じ取り、それを基にして暦を作りました。月の中にウサギや女神を想像し、月に旅することを夢みました。お月見は宮中から庶民までみんなの行事になっています。

月は今も信仰・科学・芸術の対象です。

# 竹取物語は

日本最古の物語      かな文学

いつ誰が何のために書いたのか？  
5人の貴公子はだれか？  
帝はだれか？  
月に帰ったのはいつか？

いまはむかし、竹取の翁といふものありけり。野山なる竹をとりてよろづの事につかひけり。名をば、さねきのみやつこといひける。

竹の中から生まれたかぐや姫がお爺さんお婆さんに富をもたらし、わずか三ヶ月で美しい娘に成長し、十五夜の月に還っていくというお話はみんな知っていますね。実はこれ、童話でも空想物語でもなく反権力風刺小説なのです。原本は残っておらず、成立年・作者とも不明ですが『源氏物語』に「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」という文章があることから平安初期の作品であることは確かです。物語は

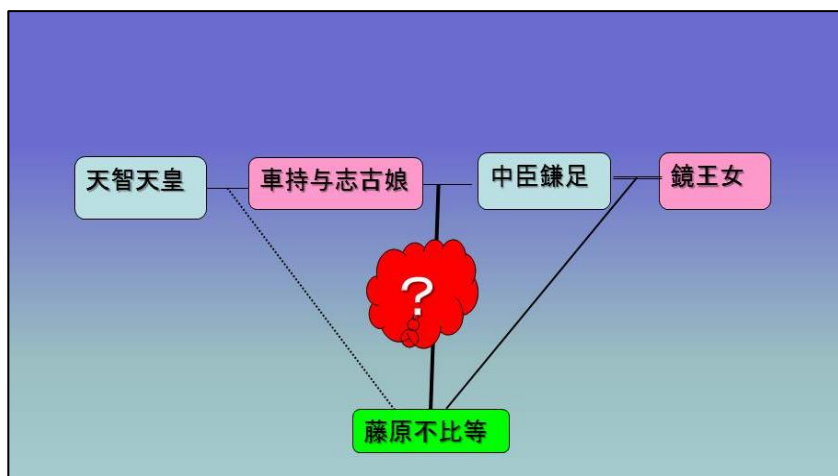
かくや姫の出現と成長

五人の貴公子の妻問い

帝の求愛

月への帰還

の部分から成り立っていますが、このうち五人の貴公子の妻問いについて詳しく書かれています。実はこの五人は実在人物ないしは確かなモデルがいるのです。しかも朝廷の高官です



阿倍御主人(あべのみうし 635-703: 右大臣)、大伴御行(おおとものみゆき 646-701: 大納言)、石上麻呂(いそのかみのまろ 640-717: 左大臣)は古代律令制が成立した飛鳥朝廷の高官です。阿倍御主人の子孫には安倍晴明がいるし、大伴御行はもちろん大伴氏で、石上麻呂は物部氏の末裔です。

石作皇子(いしづくりのみこ)のモデルは多治比嶋(624-701: 左大臣)、車持皇子(くらもちのみこ)のモデルはなんと藤原不比等(659-720: 右大臣)であることが、江戸時代からの研究ではほぼ確定しています。不比等の両親は不確かですが父は天智天皇かもしれないといわれていますが、母は車持氏出身らしいです。かぐや姫はこの五人の公達にプロポーズを受ける条件として、噂にしか聞いたことがなく、手に入るのとは非常に困難な珍しい宝物を持つてくるように伝えます。

## 5人の貴公子

火鼠の裘

龍の首の珠

燕の産んだ子安貝

安倍御主人(あべのみうし635-703:右大臣)  
大伴御行(おおとのみゆき646-701:大納言)  
石上麻呂(いそのかみのまろ640-717:左大臣)

悉く失敗

安倍御主人は唐土にある「火鼠の裘(かわごろも) (燃えないとされる布)」を唐の商人から高値で購入しましたが、それは燃えてしまった贗物でした。

大伴御行は「龍の首の珠」を探しに、財をはたき行き先もわからず船出しますが、大嵐に遭い、さらに重病にかかったため諦めてしまいました。

石上麻呂にいたっては「燕の産んだ子安貝」を取るために籠に乗って大炊寮の小屋の屋根に上ったところ、燕の糞をつかんで転落して腰を打ち、命を落としてしまいました。

## 5人の貴公子

仏の御石の鉢

石作皇子(いしづくりのみこ) ← 多治比嶋(624-701:左大臣)

車持皇子(くらもちのみこ) ← 藤原不比等(659-720:右大臣)

蓬萊の玉の枝

悉く失敗

石作皇子は天竺にある「仏の御石の鉢」を持参ということでしたが、大和国十市郡の山寺にあった古い鉢を持って行って、見破られてしまいました。

車持皇子は「蓬萊の玉の枝（根が銀、茎が金、実が真珠の木の枝）」の偽物を秘密の工房で千日かけて作らせ持つて行きます。翁はすっかり信用してかぐや姫ピンチ、というところへ報酬を支払われていない職人がやってきて嘘がばれ、なんともお粗末な結末。腹いせにその職人たちを後で滅多打ちにしています。五人のうち車持皇子が最も悪く書かれています。



かぐや姫はこの五人に無理難題を吹っ掛け退散させ、この左右大臣を含む高位高官たちの失敗を嘲笑っています。さらに帝からの入内命令にも従わず、最後には朝廷から派遣された武力にも屈せず、故郷の月へ帰ってしまうというたくましい女性です。決してなよなよいお姫様ではありません。彼女は天上で罪を犯し地上に遣られ、それが許され月へ戻るわけですが、これは左遷追放されたけど後年恩赦か何かで都に戻られた公家のようなのです。そういえば光源氏も一時左遷されていますね。

## 竹取物語の最後

あふことの涙にうかむ我身には  
死なぬ薬もなにかはせむ

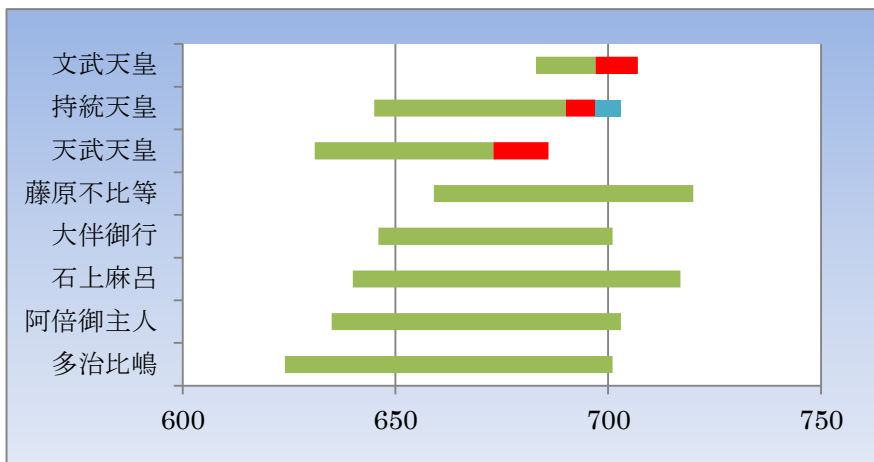
主語は帝

かのたてまつれる、不死の薬の壺添へて、御使に給はす。勅使遣はす。月のいはかどといふ人を召して、かの駿河の国にある、山のいただきへ、もてとづくべきよしおほせ給ふ。みねにてすべきやうを、教へ給へふ。文、不死の薬の壺をならべて、火をつけて燃やすべきよしを、おほせ給ふ。そのよしを、うけ給はりて、つはものども、あまた具してなむ、かの山へはのぼりける。その不死の薬を、焼きてけるより後は、かの山の名をは、**ふじの山**とは名づける。いまだ、その煙、雲の中へたちのぼるとぞ、いひつたへたる。



この物語の最後に重要な文章があります。月へ還っていくかぐや姫は帝に不死の薬と天の羽衣、帝を慕う心を綴った文を贈りました。しかし帝は「かぐや姫のいないこの世で不老不死を得ても意味が無い。」と、それを駿河国にある日本で一番高い山で焼くように命じました。それから、その山頂からは常に煙が上がるようになりました。そして「不死の薬を焼き捨てたから」あるいは勅使が「多数の士(つわもの)を連れて登った」ことから富士の山と呼ばれるようになったそうです。実際、平安時代には富士山は常時煙を吹いていたことが知られています。





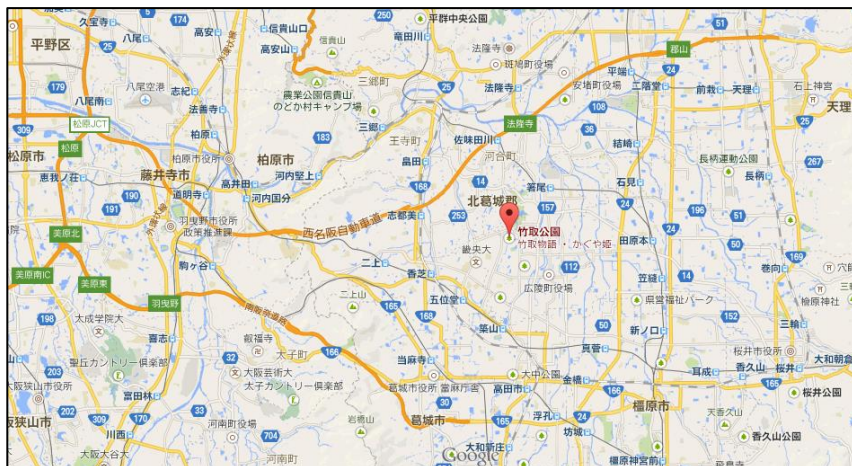
この帝とは誰でしょうか？この五人が都で活躍する時の天皇は持統、文武ですが、持統は女帝だから除かれ、問題の帝は文武（在位 697-707 年）しかありません。文武天皇は父草壁皇子が若死にしたので十四歳で即位しますが、お祖母さんの持統上皇（645-703）が実権を握っている間は、光り輝くとはいえ、どこのだれかわからない田舎娘を宮中に迎え入れるなんてもっての他だったでしょう。

したがってかぐや姫が月へ還ってしまった宵は持統上皇没後から文武天皇が亡くなるまで、すなわち 703 年（大宝二年）～706 年（慶雲二年）の中秋の名月となります。帝はかぐや姫がいなくなって病の床に伏し二四歳で亡くなったと考ええると、この中での最有力候補は没年の前年の 706 年 9 月 26 日です。

男もすなる日記といふものを  
女もしてみむとてするなり。



では『竹取物語』の作者は誰でしょうか？  
空海、源順、紀貫之、紀長谷雄、菅原道真・・・  
多数の候補者が上がっていますが、藤原不比等を  
嘲笑っているからには、藤原氏に恨みがあり、  
仏教・道教・漢籍・和歌などに精通し、もち  
ろん文才もある人でしょう。そこで紀貫之  
(866?-945?) が最有力候補になっているそう  
です。紀氏は古来の名族で、彼は『古今和歌集』  
の編者、『土佐日記』の作者としては有名です  
が、位は従五位上・木工権頭（いわば宮繕課長）  
という冷や飯食いだっただけです。そういえば  
彼のいとこの紀友則の有名な歌「久方のひかり  
のどけき春の日に しづ心なく花のちるらむ」  
（百人一首）は桜の花が散るのを悲しんでいる  
というより、「桜の後に藤（原）の季節になること  
を嫌がっている」ように思えますね。



では『竹取物語』の舞台はどこでしょうか？

候補地としては富士市・向日市などがあり、それぞれの地でかぐや姫に関するイベントが開かれています。以上のことからやはり大和でしょう。竹取の翁は「讃岐の造（さぬきのみやつこ）」と呼ばれていることから、大和国広瀬郡散吉（さぬき）郷（現奈良県北葛城郡広陵町三吉）が最適地と考えられています。

『万葉集』の巻十六に「竹取翁の歌」と称される読み人知れずの漢文の序、長歌、短歌が十一首があります。かぐや姫の物語はないようです。また『古事記』にカグヤヒメ（迦具夜比売命）という女性が登場します。第十一代・垂仁天皇の後の一人です。かぐや姫とは特定の人物の名前ではなく「輝くばかり美しいお姫様」に与えられた美称で、そう呼ばれた女性は何人もいたでしょう。



Jaxa（宇宙航空研究開発機構）は2007年から2009年にかけて月に探査機を送り、さまざまな科学調査を行いました。その周回探査機の名前は「かぐや」、搭載されたハイビジョンカメラによる高解像の映像はTVやYouTubeで公開されたのでご覧になった方も多いでしょう。

またKaguya（かぐや）、Okina-Ouma（翁姫）と名づけられた小惑星もあります。かぐや姫の物語は綿々と語り継がれ、今も現代科学の中に生きているのです